すべく、ホーンビー教育基金を設立したことについて述べた。メドレーは岩崎の師でありのちの同僚、ホーンビーはメドレーと岩崎の同僚、小川はメドレーと岩崎の弟子にして、のちに岩崎の同僚、竹林は岩崎の弟子で小川とは同僚であった。彼らの寄付行為相互のあいだに直接の因果関係があったかなかったかはともかく、彼らがある価値観を共有していたことは間違いないであろう。

二　研究と教育

1　英語教育学

(1)　専門学校の時代

教師養成機関としての英語科・英語部

英語教師の養成は、一八九七（明治三十）年に高等商業学校の附属として外国語学校が設立されたときに復活した英語科の主たる使命であった。一九〇六年五月刊の『校友会雑誌』に掲載された無名氏による論文「松籟」が引用している「語学校設立趣意書」にも、「露清韓伊西語科は主として我が国外交通商殖民の実務に当るべき人士を養ふこととし英語学科は我国の普通教育及実業教育の任に当るべき語学教員を養成し兼て外交官翻訳官商館会社の役員の素地を作るべく、仏語科は……」（一一七ページ）とあるとおりで、教員養成は英語科に課せられた特別の任務であったといえる。一八八〇年代後半から世紀の変わり目にかけては、中学校の設立が急増し、それにともなって英語教員の需要も大いに高まったが、大学や高等師範学校だけではこれに応じきれなかった。東京外国語学校とほぼ時を同じ

くして、一九〇〇年に設立された女子英学塾（津田塾大学の前身）の創立者津田梅子が開学式の挨拶で、「英学塾の目的はいろいろありますけれど、将来英語教師の免許状を得ようと望む人々のために、確かな指導を与へたいといふのが、少なくとも塾の目的の一つであります」と（日本語で）述べているのも（大庭みな子『津田梅子』朝日新聞社、一九九〇年、二二〇ページ）、当時の英語教師不足を反映したものといえよう。

期待されたその任務を外語の英語科がよく果たしたことは、卒業生の進路を調べてみると明らかである。すなわち、一九〇〇年に第一回の卒業生を送り出したとき、英語科の卒業生一〇名のうち七名が教職に就いている。卒業時に就職先が未定だった三名のうち二名もその後教師になった。翌年の第二回卒業生は一一名で、うち七名が教師、実業界に出たもの三名、未定一名。第三回卒業生は全部で一九名、うち教師一三名、実業界三名、その他三名となっている。まさに教員養成学科の観があるが、教員の不足は深刻であったらしく、第三回の卒業生が出た一九〇二（明治三十五）年に、文部省は外国語学校のなかに第五臨時教員養成所なるものを設置して、英語教員の速成に乗り出している。広島に高等師範学校が設立されて教員養成を始めたのも同じ年である。

臨時教員養成所は、「第一二」を冠したものが一九二六（大正十五）年にふたたび外語に設置されているので、ここでその概要を記しておこう。養成所は、『文部省第三十年報』（一九〇三年）に、「師範学校、中学校及高等女学校教員タルヘキ者ヲ速成スル目的ヲ以テ本年度ノ始ヨリ特別ニ開設セラレタルモノトス養成所ノ数ハ第一乃至第五ノ五箇ニシテ……」（六八ページ）とあるように、一九〇三年全国五か所に設置され、それに一から五までの番号を付したものである。そのうち英語教員の養成を課せられたのは、第三高等学校内の第四臨時教員養成所と、わが東京外国語学校の第五臨時教員養成所の二つであった。修業年限は二年で、生徒の募集は〇二年と〇四年の二回のみ。第二回の卒業生が出た〇六年に閉鎖された。外国語学校の養成所では、それぞれ、二六名、二五名の卒業生を送り出してい

る。一九二六年に再度開設されることになった養成所は、修業年限が三年となり、全国で一四か所を数える。英語科がおかれたのは、東京高等師範（第一）、鹿児島高等師範（第二）、大阪外国語学校（第五）、東京外国語学校（第一二）、小樽高等商業学校（第一四）の五校であった。一九二九（昭和四）年から三一年にかけての三年間に、外語では、それぞれ、二五、二七、二三名の英語教員有資格者を養成している。ただし、おりからの経済不況で卒業生の就職状況は思わしくなく、三一年三月をもって養成所はすべて閉鎖された。

附属機関の臨時教員養成所に多少の紙幅を費やしたのは、外語の英語科（一九一九［大正八］年以降は「英語部」となるが、以下では誤解のない限り「英語科」でこれを代表させる）を文部省がどう見ていたのかをよく物語るものと考えたからにほかならない。このほかにも、文部省が外語の英語科に英語教員養成機関としての役割を期待していたことは、一九一九年に行われた同省主催の英語教員のための夏季講習会が、外語に全面的に委託された事実によっても裏付けられよう。『英語科同窓会々報』第一五号（一九一九年）は、「文部省に於て七月下旬夏期講習会（英語）を開催せられたるが講師は全部母校職員にして会員百三十名の中母校卒業生二十七名なりき」と報じ（四ページ）、「一隅生」なる参加者の受講記を載せている（三七－三九ページ）。それによれば、講習期間は八日間。講師（担当科目をカッコに入れて示す）は、村井（アミエル［英訳］の東洋思想）、吉岡（修辞学、速読法）、片山（発音、和文英訳）、千葉（英国の歴史及び国情）、井手（詩文）、上條（応用英文法）、スミス（英語の諺）で、メドレーの名は見えないが、当時の専任教官（上條だけは、高等師範教授を兼任していた）が総出で事に当たったことがわかる。

この夏期講習は、翌二〇年、翌々二一年も、ほぼ同じ規模で行われている。ただし、どのような理由によるものか、その後は『同窓会々報』から同講習会の記事が途絶えてしまい、第二九号（一九三二年）になってようやくこの記事が復活する。この年は、七月二十五日から八月五日まで十日間にわたって行われた。参加者は「全国中等学校英語科

教師で総員三百二十数名の盛況」（二ページ）だったという。このあと三五年に講習会が行われた記事はあるが（第三二号、一〇ページ）、その前後については、記録が残っていないため、実施されたか否かは、残念ながらわからない。時局の悪化を考えれば、三六年か三七年に打ち切られたとしても不思議ではないであろう。

以上で、外国語学校の英語科が世の期待においても実態においても長らく教員養成機関であったことは明らかになったと思われるが、こうした性格は、大正時代の中頃までにはかなり変化していたようである。すでに一度引用したが、一九一七（大正六）年発行の『英語科同窓会々報』第一一号に載った村上直次郎校長の談話、「近来、本校英語科の卒業生は従来の傾向と異った傾向を有して来た。実業方面を志望するものが多くなつて、教員志望者が少なくなつて来たので、その方面の需要に応ずることが出来兼て居る」（三五ページ）は、それをはっきりと物語っている。とはいえ、戦前の外語において英語科は教職志望者が多いことで際立っていた。一九三九年度の『東京外国語学校一覧』に、同年五月に調査した「本科［別科に対する本科のこと］卒業生職業別調」なる卒業生の進路に関する統計数値が出ているが（四八〇―四八一ページ）、それによれば、一九〇〇年の第一回卒業生から一九三九年までに、英語科は一、〇三七名の卒業生を送り出している。そこから死亡および帰趨不明のもの二三四名を除くと、残りは七九四名。そのうち、教職に就いたものは三八三名で、「帰趨の明らかなもの」の四八パーセント、すなわち二人に一人が教員になっていることがわかる（教員三八三名の内訳は、中学校一八六、実業学校八五、大学・高等専門学校五七、高等女学校二六、その他二九である）。これに対して、実業が二四七名（三一パーセント）、公務員八〇名（一〇パーセント）、自営三一名（四パーセント）、その他五三名（七パーセント）となっている。英語科に次いで教員になった者の数が多いのは独語科であるが、その率は、不明者を除く卒業生総数の一五パーセントにすぎない。戦前の外語では、英語科はきわめて特異な存在であったといえよう。比較のため戦後の状況をいえば、新制大学第一回生に当たる

一九五三（昭和二十八）年の英語の卒業生三二名のうち、教職に就いたのは四名（『学報』第四号）、翌五四年は四四名のうち六名であった（『学報』第八号）。統計が完備している一九六八年度から九七年度までの三〇年間についてみると、卒業生総数一、八八二名のうち、教職に就いたものは一九一名で、一割にすぎない。ただし、進学者の数がこれを上回って、二三一名あり、このうちの多くは最終的に教員になったと考えられるので、これを先の一九一名に加えると四二二名となる（これらの数値は、「大学案内」等に公表された各年度の統計数値を筆者の側で合算した）。したがって教職に就いたものは、卒業生全体の約二割と考えてよいであろう。英語科の性格は、進学者を考慮しても、やはり戦前とは大きく様変わりしたわけである。

こうして、実質は教員養成所だった戦前の外語（の英語科）であるが、高等師範とまったく対等の扱いを受けていたわけではなかった。一九三一（昭和六）年に卒業し、県立高田高等女学校に赴任した小川芳男は、「高師の卒業生は、卒業と同時に教員免許状がもらえるが、教員養成校ではない外語は、教員志望者は卒業と同時に文部省に申請し、免許状をもらうことになっていた」と書いている（『私はこうして英語を学んだ』（TBS・ブリタニカ、一九七九年、八九ページ）。小川は、同時に着任した広島高師出身者の給与が九〇円だったのに、校長から八〇円で我慢してくれといわれて納得せず、談判のすえ、免許状がおりたら九〇円に上げるという約束を取りつけている。

英語教授法の開発

高等商業学校附属外国語学校の第一回入学生が三年生（最上級生）になった一九〇〇（明治三十三）年に、経済学・国際法・教育学の三科目が新たに兼修科目として開設された。このうちの教育学は、教員になるための授業で、今日でいう教科教育法に相当する。英語科ではこれを浅田栄次が担当した。浅田は既述のとおり、シカゴ大学で聖書

学を修め、同大学から最初の博士号を授与されるという栄誉を担ったが、米国から帰国したのち、とりわけ外国語学校設立と同時に教務主任を任されてからは英語教育に専心し、『小学校用文部省英語読本』三巻、*Asada's English Readers* 五巻、*Asada's Practical Readers* 五巻などを編纂するかたわら、高等学校大学予科入学者選抜試験委員、教員検定委員会臨時委員（「臨時」とはいっても、一九〇二年以降一二年まで毎年委嘱されている）、文官高等試験臨時委員（一九〇六―一四）、中等学校における英語教授法調査委員、文部省視学委員などの要職を務め、わが国英語教育界の権威者としての地位を確立した。浅田は英語教授法に関するまとまった著書は残していないので、彼の教授法に関する考え方は、『英語読本』の緒言やいくつかのエッセイから推測するほかないが、主眼は、音声訓練を徹底し、英文の解釈にあたっては、文法訳読主義をやめて、パラフレイズによるべし、とするものであった（浅田自身の授業ぶりは、本稿の「一　組織と制度の変遷、4　東京外国語学校、（2）教授陣とその授業（1）」の項でかなり詳しく紹介したので参照されたい）。

浅田が一九一四（大正三）年に四十九歳という働き盛りでなくなったあと、英語教授法の担当は吉岡源一郎に引き継がれた。主任の突然の死にとまどいを隠せなかった吉岡だったが、翌年村上校長の努力で近くの錦城中学校が教育実習校の場を提供してくれることが決まると、教授法研究のため、自ら志願して同中学校で授業を担当し、これを一〇余年にわたって続けている。また、一七年には、東京およびその周辺で英語教育にたずさわっている外語出身者を集めて「英語教授法研究会」を組織して会長を引き受け、同年六月二三日に第一回の会合を開いている。当初幹事は木下芳雄と松本肇（ともに明治三十七年卒）が務めたが、のち松本の後任として岩崎民平（大正二年卒）が推挙された（『英語部同窓会々報』［第二七号、一九三〇年、三―四ページ］に掲載されている吉岡の回顧「英語教授［法］研究会について」を参照）。こうして始まった会は、毎年一回開催され（規約では年二回開くことになっていた）、能力

別クラス編成、発音の指導、辞書使用法、米国における教授法など、会員からの研究報告をめぐって、毎回活発な議論が展開された。学校からは校長（当初村上直次郎、のち長屋順耳）はじめほとんどの専任教官が参加している。

ところが一九二一（大正十）年の第五回を境に、研究会の記事は『同窓会々報』から消えてしまう。その裏には、「然し何分にも本会は立派に組織立って居るものでなく、会合毎に顔触もかはり、或る時は単に懇親の会となって居りました」という事情があったようである（前掲吉岡の「回顧」、三ページ）。そして一九三〇（昭和五）年にいたり、「本会を今少しく組織立ったものにして真に英語教授研究会にしたいといふ意見も出で」（同三ページ）、会の再建が決定され、その第一回会合が翌三一年二月に開かれたのだった。この席で吉岡は、「今日迄高等師範学校では已に種々教授法の研究をして来て居り、現在我国で普通に見るところの教授法は直接間接に高師の研究によって出来て居るものである様に考へられます。我等も若し何か我等の善い特色を織込みたる教授法を見出すことが出来ますれば、それは我国の英語教育に必ず多大な貢献をすることゝ信じます」といっているが（『英語部同窓会々報』第二八号、一九三一年、四ページ）、高師の教授法に対置しうる外語独自の教授法の開発は、外語関係者の共通の願いであったにちがいない。ところが、新研究会も翌年七月の第四回会合をもって、『同窓会々報』からは消息不明の存在になってしまう。すなわち、前述の文部省主催の夏期講習会と同様の運命をたどったのである。

復活第一回目の会合のおり、校長の長屋順耳（東京帝大英吉利文学科出身で、広島高師の教授を務めた）は、自分がこれまでに出会った英語教師について、「東京高師の人はそのタイプがあって、ちやんと一定して居た。文学士は何処となく修養を積んで居るところがあるやうに見へた。外語出身の人は、全体に英語の力はあるやうに見へたが、教授法は下手であると思つた。又中等学校長などの話を聞くと、外語出身の中には突飛な人、又は全体の平和を破るといふやうな人が割合に多かつたやうである」との感想をもらしているが（前掲誌、五ページ）、これは、以後長ら

く学外者の固定観念（ステレオタイプ）を代表するとともに、学内者にとっては強迫観念（オブセッション）になったように筆者には思われる。どうであろうか。

教授法研究会の会長は最後まで吉岡が務めたが、英語教授法の授業は、いつのころからか片山寛が担当するようになり、のちには大橋栄三も加わった（前掲吉岡の「回顧」、三ページ）。片山は弱冠二十五歳で恩師マッケローとの共著『英語音声学』を著しているが（本稿「英語音声学」の項参照）、生涯を通じての主たる関心は英語教育にあったようである。一九一二（大正元）年に、『ナショナル第四読本研究（上巻）』（熊本謙二郎・喜安璡太郎編、研究社）に寄稿したのを皮切りに、文部省検定教科書 *Katayama's First English Grammar, Katayama's Advanced English Grammar*（研究社、一九一六年）、*The Herald Readers*（泰文堂、一九三〇年）や学生用の副読本を書いている。教授法そのものの研究としては、『我国に於ける英語教授法の沿革』（研究社、一九三五年）が知られている。片山は一九三八（昭和十三）年、大橋は四一年にそれぞれ停年退職した。

外語の英語教育学を語るにさいしては、岩崎民平の名も忘れることは出来ない。岩崎は外国語学校に教授として着任する以前、中学校の教師を六年間務めて現場経験を積んでおり、上記の英語教授法研究会の主要なメンバーでもあった（のちに同研究会の幹事を任されたのは既述のとおり）。片山同様、若くして英語音声学に関する著書を公刊し注目されたが（「英語音声学」の項参照）、やがて文学作品の注釈や辞書編纂に関心を移し、そのかたわら中学校用の教科書を編集している。至文堂から出版された *A New English Grammar*（一九二五年）、*New English Composition*（一九三〇年）、*Concise English Grammar*（一九三八年）がそれである。また『英文法の教授と問題』（研究社、一九三六年）も、英語教育の分野での業績と考えるべきであろう。

「教育学」は、一九四四年に東京外国語学校を改組して設立された東京外事専門学校でも開設されているが、はた

して戦中・戦後の混乱期に、学則に規定されたとおりの授業（三年次に年間七〇時間）が行われたであろうか。この点については調査が出来なかった。

（2）　新制大学以後

敗戦後にわかに起こった英語ブームのなかで、対外的にもっとも華々しい活躍をした英語教官は小川芳男（一九〇八－九〇、昭和六年卒）であった。小川は、新潟の高田高等女学校で四年半、米沢の高等工業学校で二年半、合計七年にわたる英語教育の現場を経験し、一九三八（昭和十三）年に片山寛の後任として母校に迎えられている。四六年、ＮＨＫからラジオの基礎英語講座の講師を依頼され、これを五二年まで務めて（四七年度だけは、恩師岩崎民平が小川の「代講」をした）、一躍全国に名を知られるようになった。また、戦後まもなく新しい文部省検定教科書の作成に取りかかり、*The Gate to the World*（中学校用、一九四七年）と *The World through English*（高等学校用、一九四八年）の編集責任者となっている。それと、四六年に日本英文学会の大会が東京で開かれ、英語教育に関する分科会が設けられたさい、その責任者として研究発表をするなど、若手の英語教育の専門家として自他共に許す存在となっていた。したがって、外語が新制大学になり、英語教育法の講座を設ける必要が生じたとき（新制大学では、教育職員免許法に基づく専門科目の単位を修得すれば、だれもが中学校・高等学校の教員になれる道が開かれたのである）、この担当者として小川に白羽の矢が立てられたのは、ごく自然の成り行きだった。小川は、新制第一回入学者が四年生になった一九五二（昭和二十七）年に正式に教職課程に移り、ここで英語教員のための「特殊講義」を開いている。ただし、彼は第一部（英語専攻）との関係をその後も保持し、一九六一年に第三代学長に就任するまで、一・二年生の専攻語の授業のみならず、後期専攻語科目の「パブリックスピーキング」なども担当した。

小川の著作は膨大な数に上り、その分野も辞典・事典、教科書、学習参考書、一般向け実用書から、児童書および英語教育学の専門書の翻訳、随筆まで多岐にわたっている（その全貌は［ただし一九七七年までの］、日本英語教育史の貴重な証言というべき前掲の回顧録『私はこうして英語を学んだ』の巻末に詳しい）。英語教授法の分野でも、『英語の教え方――研究と演習』（目黒書店、一九五〇年）、『教室における発音指導法』（研究社出版、一九五九年）、『英語教授法展望』（共著、研究社出版、一九六二年）、『英語教育法』（国土社、一九六三年）、『これからの英語教育』（国土社、一九六五年）ほか多数が知られている。また忘れてならないのは、外語での教え子を結集して編纂した『英語教授法辞典』（三省堂、一九六四年）で、これは十九世紀以来の外国語教授法の術語のみならず、戦後日本の英語学会・英語教育学会を席巻したアメリカ構造言語学の術語も多数収録し、かつ内外の英語教育学者の履歴と業績も詳しく解説したユニークな参考図書である。八二年の改訂版では、初版の協力者がそれまでの一八年間にそれぞれ一家をなしていて、師とともに共同編集者として名を連ねている。すなわち、小島義郎（昭和二十三年卒）、齋藤次郎（フランス語、同二十六年卒）、若林俊輔（同三十年卒）、安田一郎（同十九年卒）、横山一郎（同三十年卒）らである。（なお、小川の英語辞典関連の業績については、本稿各論の「英語辞書編集」を参照。）

小川は外語をやめたあとも、幅広い人脈、円満で気さくな人柄、世話好きな性格ゆえに、各種団体や学会の長を依頼されて引き受けている。このうち、語学教育研究所の理事長、日本英語検定協会（いわゆる「英検」の実施団体）会長、ＪＡＣＥＴの名で知られる大学英語教育学会の会長、これら三つの職は、外語における小川の同僚梶木隆一が引き継いだ。

小川が学長に就任したあと教科教育法を任されたのは、第一部（のち英米科、英米語学科）の海江田進で、海江田は、六二年から停年退職する七二年まで一〇年間この地位にあった。海江田も小川同様、教職課程と英米科の授業

（後期課程では「和文英訳」および「パブリック・スピーキング」など）を「かけもち」している。海江田の退職後の七二年から八〇年まで、教科教育法は、非常勤講師の山家保（昭和十一年卒）と安田一郎（前出）の手に委ねられた。

英語教育法が専任教官の手に戻ったのは、若林俊輔が教授として東京学芸大学から外語に転任になった一九八〇（昭和五十五）年四月である。これは外語の英語教育学の歴史において画期的な出来事であった。というのは、このとき若林が就任したのは、共通講座の教育学であって、若林は単に教科教育法だけでなく、演習と卒業論文演習をも担当したからである（小川と海江田は、在職中ついに卒業論文指導をすることはなかった）。「英語教育学」、「英語教育学演習」、「英語教育学卒業論文演習」がそれらの正確な名称である。これによって外語の英語教育は英米（語学）科の「出店」の状態から独立するとともに、学問研究の対象として正式に認知されたのであった。

若林は、英語教育学者の常としての中学・高校の検定教科書編集に長年関わっているほか、文字論、英語教師論、教育の現場から見た英文法論、英語辞典などの分野で数多くの著作をものしている。英語教育界の論客としても知られ、とりわけ外語着任直後の八〇年代初頭に、公立中学校の英語の時間が一週三時間に減ったおりには、数人の同志と反対する会を結成し、国会へ請願に出向き、全国を行脚して講演するなど、ペンばかりでなく、さまざまな手段を使って運動を展開した。また、二年半で敢えなく終刊とはなったが、同じ時期に、月刊の『英語教育ジャーナル』を三省堂から発刊し、編集主幹として論陣を張った。

教育学の講座は、若林が一九九四（平成六）年に退職すると、根岸雅史（当時講師、翌九五年から助教授）が一般語学科目から学内移籍して引き継いだ。根岸は九五年の学部改革以後、言語・情報講座（人間環境系列）に所属している。

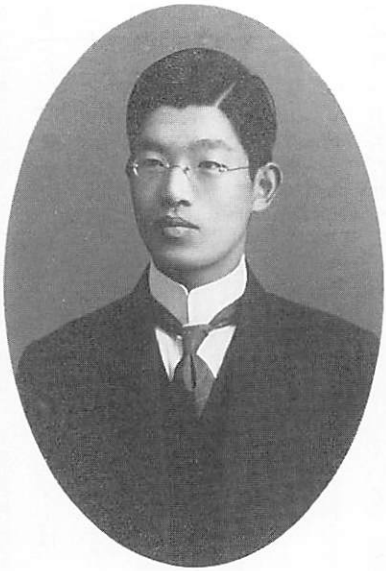
2　英語学

(1)　戦　前

本学における英語学の研究と教育を語る場合に最初に取り上げなければならないのは、片山寛であろう。片山は、音声学において名を残しているが（後段の「英語音声学」の項参照）、英文法についても造詣が深かった。一九〇四年に刊行されたC. T. Onionsの*An Advanced English Syntax*は、わが国の英文法研究者たちに多大な影響を与えた本であるが、彼は英語科の授業でこれを何度もテキストに取り上げている。『英語青年』（一九七八年五月号）の追悼記事の中で、弟子の小川芳男は「先生の講義から先生はtenseに委しいと感じた」と述べているし、海江田進も「片山先生の英文法に関する知識は、きわめて精密なものであったと思う」と述べているところから判断すると、片山のそのような学識は、教え子の細江逸記（明治三十九年卒）の思考形成に影響を与えたであろう。

その細江に厳格な学問の方法論を教え、深甚の影響を与えたのは、片山よりもむしろ初代英語科主任の浅田栄次であったと思われる（浅田の経歴と人物については、「東京外国語学校」の項ですでに述べたのでここでは繰り返さない）。細江は、本学卒業後、石川県立第一中学校・大阪府立北野中学校教諭、大阪高等商業学校助教授を経て、一九一五－一六年東京外国語学校講師を務め、さらに東京府立第一中学校教諭を経て、一九一九年から大阪高等商業学校（後の大阪商科大学）教授として一九四四年の停年退職まで在職した。東京府立第一中学校教諭時代に、東京帝国大学文科大学の市河三喜助教授と「対格つき不定詞」構文をめぐって論争したことは大変有名である。その間、『英文法汎論』（文会堂、一九一七年）、『動詞時制の研究』（泰文堂、一九三二年）、『動詞叙法の研究』（泰文堂、一九三三

年)、『ヂョーヂ・エリオットの作品に用ひられたる英国中部地方言の研究』(学位論文、泰文堂、一九三五年)など優れた研究書を次々に上梓していった。わが国の本格的な英語学研究は、市河三喜の『英文法研究』(研究社、一九一二年)をもって始まるとされるが、これは英語に見られる各種の興味深い語法を、いろいろな用例に基づいて歴史的・心理的要因にも言及しながら記述したものであって、英文法の組織的記述にはなっていなかった。これに対して、細江の『英文法汎論』は、本格的な英語統語論を構築する目的で書かれたものであり、明晰な論述と広範な用例収集などの点でも画期的な著作と言えよう。また、『動詞時制の研究』と『動詞叙法の研究』においては、tenseを時の区別を表わすものというよりはむしろmood表現の表われと見る著者独自の文法哲学が披瀝されていて、この分野の基本文献として今日まで読み継がれてきている。もし細江が東京外国語学校一筋に研究者・教育者としての全生涯を全うしていたならば、その後の本学の英語学研究は、さらにめざましい発展を遂げていたのではなかろうか。



細江逸記

岩崎民平については、すでに述べる機会があったので、ここでは彼が東大での恩師市河三喜の『英語学辞典』(研究社、一九四〇年)に「文法」項目の執筆者として加わったこと、および、戦後になって、大塚高信・中島文雄とともに「英文法シリーズ」や「英語学ライブラリー」を編集して、英語学研究の隆盛に貢献したことだけを記すに留める。

ロンドン大学の講師を務めていたハロルド・E・パーマー(Harold E. Palmer)は、一九二二年に文部省の

外国語教授顧問として来日し、翌年、英語教授研究所を創設して所長となって、わが国の英語教育改善に多大な貢献をした。Oral Method の提唱者だったパーマーは、*A Grammar of Spoken English* (Heffer, 一九二四年) というユニークな英文法書を出しているが、用例をすべて音声記号で記し、強勢・音調まで表示するなど、徹底して音声学的観点から英語の口語文法を記述したものである。この本は、戦後になっても、本学の英文法の授業のテキストとして使用されたこともある。彼は東京外国語学校でもしばし教鞭を執ったが、一九三六年帰国することになり、その際にあとを託したのがアルバート・シドニー・ホーンビー (Albert Sidney Hornby) である。ホーンビーは、外国人英語学習者を対象とした初の英英辞典を編纂したことで知られているが (詳しくは「英語辞書編集」の項参照)、他方でパーマーの発案を受け継いで動詞型という概念を確立し、*A Guide to Patterns and Usage* (Oxford University Press, 一九五四年) という名著を残している。英語の文構造を捉える方法として、従来のアニオンズ流の五文型は多少目が粗いという欠点が見られたが、ホーンビーは、直接目的語・間接目的語などの機能面と、不定詞句・節・分詞などの構造面をうまく組み合わせた二五動詞型という斬新な枠組みを提案した。以上のことからよく分かるように、ホーンビーの応用英語学者としての発想の豊かさは、実に際立っていた。

(2) 戦　後

昭和の前半期には、片山寛、千葉勉、岩崎民平、メドレー、ホーンビーらの教えを受けて、小稲義男 (昭和二年卒、辞書編纂)、沢崎九二三 (同二年卒、英文法)、山田和男 (同二年卒、和英辞典編纂・英作文法)、小栗敬三 (同二年卒、英語音声学)、皆川三郎 (同三年卒、英学史・英語教育)、小川芳男 (同六年卒、英語教育)、海江田進 (同六年卒、英語教育)、岩田一男 (同七年卒、ベストセラー『英語に強くなる本』の著者)、大村喜吉 (同十三年卒、英学

史）、山川喜久男（同十五年卒、英語史研究）、安倍勇（同十六年卒、実験音声学）、小西友七（同十六年卒、辞書編纂・語法研究・黒人英語研究）、半田一郎（同二十年卒、文法理論・北欧諸語研究）など、豊富な人材が輩出するようになるが、英語学の各分野における彼らの本格的な活躍は戦後になってからである。

一九四九（昭和二十四）年に本学は新制の東京外国語大学として再スタートを切るが、その直前の一九四八年に幾人かの俊秀が卒業する。すなわち、竹林滋、伊藤富士磨、小島義郎、上田稔である。そのうち、竹林は一九六六年から一九八九年まで本学で教鞭を執り、音声学の分野を中心に本学の言語研究を飛躍的に発展させた（詳しくは、「英語音声学」の項を参照のこと）。また、伊藤は辞書編纂において、上田は英語史・比較言語学の分野で、小島は辞書学・辞書編纂・英文法・意味論など多方面で目覚しい業績を上げている。

佐々木達

戦前の言わば揺籃期の英語学研究を、戦後になって質・量ともに大きく変革させる契機となったのは、一九四六年に東京外事専門学校教授として着任し、以後一九六六年に停年退職するまで英語学を講じた佐々木達（一九〇四－八六）である。佐々木は、個人的理由からいろいろ回り道をしたために、一九三〇年に東京帝国大学英吉利文学科を卒業しているが、年齢的には中野好夫や大塚高信と同期である。佐々木は、市河三喜の後をうけて東京帝国大学英語学教授に就任した中島文雄とは、気質・学問の両面において異なっていた。佐々木は、若い頃から一貫して詩歌の言語に対して強い関心を抱いており、そのことは卒業論文の

On the Language of Robert Bridges' Poetry に表われているばかりでなく、その後の『英詩のことば』（語学出版社、一九四九年）、『近代英詩の表現』（研究社出版、一九五五年）などにも十分に伺える。『近代英詩の表現』は「文法」と「文体」の二部から成るが、第一部では英語の詩歌から自在に実例を引きつつ品詞別に言語特徴を捉え、第二部では聯の構造・聯の集合と配列という観点から今日の詩学研究を先取りするような斬新な分析を行っている。

佐々木は、伝統的な英語学の研究においても抜きん出ていた。すなわち、恩師の市河が『英語学辞典』を編集するに際しては、実質的に編集の要としての役割を務め、「英語史・固有名」の項目をすべて執筆している。とくにこの固有名の部分と、『語学試論集』（研究社出版、一九五〇年）に載せた言語学者評伝は、後に弟子の木原研三との共編として刊行された『英語学人名辞典』（研究社、一九九五年）の基盤を成すにいたる実に優れたものだった。このような英語学史・言語学史的著作は、佐々木がいかに広範に文献渉猟を行っていたかの証左であろう。『語学試論集』に集められた諸論文は、すべて『英文学研究』や『英語青年』などに寄稿した専門的論文であるが、いずれにおいても佐々木の言語感覚は群を抜いており、刺激的な卓見に満ちていた。佐々木の主要論文は、新たに書き下ろした論文も加えて、退職の年に『言語の諸相』（三省堂、一九六六年）として、五百ページを超える大冊に纏められて刊行された。この本の巻末には、東京外国語大学での「私の語学遍歴」と題した最終講義が再録されていて、不世出の英語学者佐々木達の生の声を聴くことができる。

佐々木の薫陶を受けて、その後本学からは多彩な英語学者が輩出するようになった。たとえば、中尾啓介（昭和三十年卒、辞書学・辞書編纂）、小川繁司（同年卒、辞書学・辞書編纂）、横山一郎（同年卒、構造言語学・辞書編纂）、岡部匠一（同年卒、近代英語研究）、堀内克明（同三十一年卒、現代英語研究・辞書編纂）、松田徳一郎（同三十二年卒、生成文法理論・辞書編纂）、東信行（同三十三年卒、英語史・英文法・辞書学・辞書編纂）、渡邊末耶子（同三十

四年卒、英語音声学・辞書編纂）、宮川幸久（同年卒、英文法・辞書編纂）、山岸和夫（同年卒、英文法・辞書編纂）、光延明洋（同三十五年卒、言語人類学・認知言語学）、宮井捷二（同三十六年卒、社会言語学・辞書学・辞書編纂）、諏訪部仁（同三十七年卒、S・ジョンソン研究・辞書編纂）、山中桂一（同三十八年卒、R・ヤーコブソン研究・詩学・記号論）、秦宏一（同三十九年卒、英語史・比較言語学・北欧諸語研究）、木村建夫（同四十年卒、英語史・辞書編纂）など、英語学のあらゆる領域にわたっている。

佐々木達とほぼ時期を同じくして本学で英語学を講じていたのは、乾亮一（在職一九五一―六九年）と半田一郎（同一九五六―八七年）である。乾は一九三五年に東京帝国大学英吉利文学科を卒業した市河門下生の一人であり、英語史・英文法・比較語学などを専門にしていた。文部省から刊行された『国語の表現に及ぼした英語の影響』（一九五八年）は、今で言うところの対照言語学の先駆的研究である。また、「英文法シリーズ」（研究社出版）の中の『分詞・動名詞』（一九五五年）、「英語学ライブラリー」（研究社出版）の中のストッフェル著『強意語と緩和語』（東信行・木村建夫との共訳述、一九七一年）、*The Kenkyusha Dictionary of Current Idiomatic English*（共編、研究社、一九六四年）などが代表的な著作であるが、いずれにも乾の優れた言語感覚が生きている。ただ、現役の学究生活の後半にいたって健康を崩し、停年退職の前に本学を辞したのはまことに残念であった。

半田一郎は、戦後多年にわたって本学の英語学教育の中枢を担ってきたが、とくにイェスペルセン著 *The Philosophy of Grammar* の邦訳（『文法の原理』、岩波書店、一九五八年）を刊行するという偉業を成し遂げた。この本は、イェスペルセンが自己の文法理論の全体像を詳述した歴史的著作だが、ヨーロッパの様々な言語から多彩な用例が引用されており、きわめて難解な研究書であった。それが、この名訳によって、実に明快に理解できるようになったのである。今日なお、イェスペルセンの言語研究を再評価する人々が絶えないことを鑑みるにつけ、もしこの方面の研

究がさらに推進されていたら、これも本学における英語学研究の大きな特徴となっていたことであろう。

佐々木や乾の教えを受けて、その後の本学の英語学研究を支えたのは、松田徳一郎と東信行である。松田は本学で学んだ後、東京大学大学院を経て、若くしてアメリカに渡り、インディアナ大学で構造主義言語学と変形生成文法について研鑽を重ねて、一九六四年に変形生成文法の枠組みに基づいて古英語統語論を扱った研究 A Transformational Analysis of the Old English Pastoral Care によって博士号を取得した。帰国後の一九六六年に本学に着任し、以後一九九六年の停年退職まで一貫して文法理論の研究・教育に邁進した。佐々木はいわゆる新言語学には手を染めなかったようだが、松田によってやっと本学にも、アメリカ流の言語理論研究の種子がまかれることになったのである。松田の初期の教え子の中で、現在、馬場彰（昭和四十三年卒）が生成統語論を、宗宮喜代子（同四十五年卒）が意味論を本学で講じている。東信行は、本学で佐々木・乾の教えを受けた後、東京大学大学院では中島文雄の教えを受ける僥倖に恵まれ、英語史研究者としてスタートしたが、若い時から言語形式と意味の相関関係に深い関心を寄せ、徐々に記述英文法・日英語比較研究・辞書学など多方面へ研究を広げていった。戦後の英米語学科の講義要項を見ると、周期的に乾・半田などがアメリカ英語概説の授業を行っていることがわかるが、この伝統は東にも受け継がれており、『アメリカ英語概説』（竹林滋・髙橋潔・髙橋作太郎と共著、大修館書店、一九八八年）として結実している。松田と東は辞書編集においても多大の業績を上げているが、これについては本稿の「英語辞書編集」を参照されたい。

本学における過去百年間の英語学研究を通観してわかることは、英語学のほとんどすべての領域にわたって、多彩な人材が多種多様な研究・教育を行ってきたということだろう。とくに、音声学・音韻論、記述英文法、文法理論、英語史、文体論、英語教育、辞書学、辞書編纂などの分野における蓄積はかなり大きい。しかし、これらに安住する

ことは許されない。各分野の継承者を養成するばかりではなく、従来の研究に多少とも欠けていたと思われる一般理論的探求と、もっと先端的な領域の開拓に乗り出す必要があるのではなかろうか。

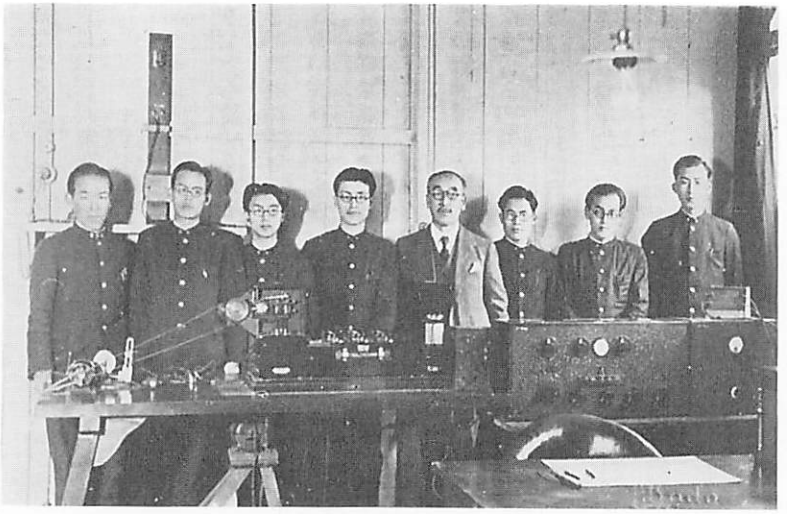
3　英語音声学

(1)　戦　前

東京外国語大学からは世界にも通用する音声学者が何人か出ている。ここでは、主に英語科を中心に外語における音声学の研究と教育について簡単にその歴史をたどってみる。

音声学は、十九世紀後半になってヨーロッパ、とりわけドイツや英国において機械を使った分析が盛んとなり、科学的な学問の仲間入りをした。英国ではヘンリー・スウィートが活躍していた時代であるが、この有名な音声学者の名前は日本でも知られ、その音声学書を底本として附属外国語学校英語学科のマッケロー（在職一八九七―一九〇〇年）と、その外語での教え子であり英語科第一回目の卒業生でもある片山寛（明治三十三年卒）が共著の『英語発音学』（上田屋書店、一九〇二年）を出版している。これは、日本における初の学問的な英語音声学の入門書となった。片山はこの本が出版されたのと同じ年に英語学科の講師となり、一九〇五（明治三十八）年に教授となって一九三八（昭和十三）年に退職するまで東京外国語学校で教えた。

当時、音声および音声学の教育が週にどの程度、どのような内容で行われていたかについては不明なことが多いが、現存する資料で見るかぎり、一九二九（昭和四）年、つまり東京外国語学校の修業年数が三年から四年に移行して二年目の学則では、文科、貿易科、拓殖科のいずれの科でも第一学年の外国語の授業の中で「発音」が教えられ、これ



千葉勉を囲んで（音声学実験室にて、1930年頃）

とは別に文科第三学年の選択科目の一つに言語学の科目として「声音学」が挙がっている。

片山が着任して一四年後、外語の英語学科はまた一人の音声学者を迎え入れることになる。千葉勉（東京帝国大学英吉利文学科、明治四十年卒）である。千葉は、東大講師、英国留学を経て一九一六（大正五）年に講師、三年後からは教授として外語で教鞭を執るようになった。東大では英文科で学んだ千葉は、外語に来てからも初めは十八世紀の英文学を講じていたようだが、のちに興味と研究の対象が音声学に移った。千葉の、主に実験的手法を用いた音声学研究の分野での業績は、今でも内外の音声学の論文や文献で引用されるほどである。じつは、千葉は東京外語初の音声学実験室の責任者の立場を任されることになり、それ以降この実験室の設備を利用しての研究で功績を上げたのである。

「東京外国語学校仮校舎建物配置図」を見ると、一九二七（昭和二）年までは「附属室」となっていたおよそ四八平方メートルの部屋が、二年後の二九年の配置図からは「音声学実験室」と名を変えている。学則の、修得すべき単位の表に「声音

学」が挙げられるようになったのと時を同じくしている。この竹平町キャンパスの皇居外濠の土手に接した東南の隅の、物置を改造した実験室こそが、東京外語の初めての音声学実験室である。これは、その直前に大阪外語に実験室が認められたのを受けて東京も文部省に申請して予算が下りたもので、当時の長屋順耳校長は初め片山寛にこの新しい実験室の運営を依頼した。ところが片山はこれを辞退、代わりに千葉を推薦したといういきさつがあったようだ。（佐藤良雄氏［フランス語部、大正十三年卒］による。氏は外語と東大を卒業した後、一九三八年より七年間にわたって千葉が責任者を務める音声学実験室での仕事を手伝った。当時のことに詳しく、この度の原稿執筆にあたっては大変お世話になった。）

千葉は一九三一（昭和六）年には日本語の五つの母音を実験室のオシログラフを使って分析、ダニエル・ジョーンズ（Daniel Jones）の基本母音と比較した論文を発表し、同年ジュネーヴで開かれた国際言語学者会議で報告したところ、国際的に認められることとなり、翌年には国際言語学者会議の常任委員に推薦された。さらに三五年、千葉は *A Study of Accent : Research into its nature and scope in the light of experimental phonetics* という本を英語で書いて冨山房から出しているが、その序文で次のように書いている。

The present study is based on experimental research in speech-sound made in the phonetic laboratory of the Tokyo School of Foreign Languages, which was designed and established by the author under the auspices of the school.

（これは東京外国語学校の援助の元、筆者によって設計され創設された音声学実験室で行われた、言語音についての実験結果をまとめた研究である。）

この著書で千葉が扱ったのはアクセントとイントネーションであるが、対象となったのは英語のほかドイツ語、フ

ランス語、日本語、中国語、朝鮮語、ヒンドスタニー語、ロシア語、モンゴル語の九言語で、いずれも当時の東京外国語学校に設置されていた語科の言語である。分析には主にオシログラフが用いられたようである。千葉は文学部の出身であったわけだが、音声学実験室には時給で雇用された事務官のほかに、東京帝国大学から理学士が実験助手として入った。千葉はその後梶山正登と共著で *The Vowel, its Nature and Structure*（開成館、一九四一年）をやはり英語で著したが、これは世界的に高い評価を得た。共著者の梶山は、音声学実験室に東大から派遣された技官で、物理学士であった（のちに武蔵工業大学の教授となっている）。

このように音声学実験室は有効に使われたのだが、第二次世界大戦中は一九四四（昭和十九）年、西ヶ原新校舎への移転、次の年には校舎の焼失という苦難にあい、この間器材は土手の横穴に入れられて焼失は免れたとのことであるが、同年に千葉が退職して音声学実験室は開店休業の状態に追い込まれた。

（2）戦　後

戦後、千葉が退職し実験室は使用されなくなっても、第一部（英米圏）での音声面の授業は専任の岩崎民平（大正二年卒）、小川芳男（昭和六年卒）、非常勤講師の安倍勇（昭和十六卒）などによって続けられた。

岩崎民平は、外語では片山に音声学を学んでいる（岩崎は、マッケロー・片山共著『英語発音学』によって非常に刺激を受け開眼させられた、とマッケローの死去に当たって『英語青年』一九四〇年三月号で書いている）。岩崎は母校卒業後中学の教員を経て東大へ進学、一九二二（大正十一）年に東京外国語学校英語部の講師として着任した。東大進学前の一九年には早くも『英語　発音と綴字』（研究社）を出しているが、このあと東大での恩師、市河三喜の『英語発音辞典』（研究社、一九二三年）を実質的に執筆した。岩崎は、英和辞典編纂の分野で多大な功績を遺し

たが、同時に辞典における発音表記では、それまで使われていた複雑なウェブスター式表音法の代わりに国際音標文字を採用してその普及に努め、また英語の発音を表わすのに日本語のカタカナを使うという方法を批判した。戦後はアメリカ英語の発音を辞典で記述する必要が出てきたが、英音と米音とを効率よく表わす独自の簡約式表記法を考案、採用し、これは現在でも多くの辞典で使われている。恩師片山、そして千葉が退職したあと、この岩崎が外事専門学校の英米科の、そして東京外国語大学に昇格後は第一部の音声教育に力を注いだ。岩崎民平は、一九五五（昭和二十）年から六年間、第二代学長を務めた。

岩崎のあと、第三代学長となった小川芳男（在職、一九三八―六九）は英語教育での功績が大きいが、講義や著書を通して発音の教育にも力を注いだ。また、非常勤講師としてではあるが、一九四一（昭和十六）年英語部卒業の安倍勇もまた母校で英語の音声に関する講義を受け持ち、研究面では主にイントネーションに関する論文で世界的に通用する業績を上げた。

このように、外語での音声に関する教育と研究は絶えることなく続けられたが、音声学実験室は一九四九年東京外国語大学に昇格後も、責任者の退職と戦争によって閉鎖されたままになっていた。しかし、当時を知っている教官の間からは、言語の研究に欠くことのできない音声学の講座を再び開設すべきであるという声が強くあり、大学院が新設された一九六六（昭和四十一）年、国立大学では初めて音声学講座が新設され、二人の教官が着任した。一般音声学の竹林滋（在職一九六六―八九年）と、実験音声学の吉沢典男（在職一九六六―八八年）である。新しい音声学講座は語科に属するものではなく人文科学系列の講座であったが、竹林は外語の卒業生（昭和二十三年）でもあり、英語音声学が専門であったので、全学を対象とした「音声学概論」の講義とゼミ、「比較音声学」、大学院での音韻論の講義のほか、英米語学科二年生全員に対して英語音声学入門の授業も担当した。竹林は、一九九六年にはそれまでの

研究の集大成である大著『英語音声学』（研究社）を著した。同書は中級以上の英語音声学書としてはわが国においてほとんど唯一の存在である。竹林の恩師は岩崎民平であるが、岩崎の仕事を引き継いで竹林もまた辞書編纂の仕事でも有名である（詳しくは「英語辞書編集」の項参照）。

吉沢典男の専門は国語学であったが、医学博士でもあり、国立国語研究所、千葉大学を経て着任した外語大では実験音声学研究室を開き、主に機械類を使った音声分析と生理音声学の講義、ゼミを受け持った。言語障害のある患者の発声訓練なども専門とし、臨床音声学の仕事も続けていた。

一九八八（昭和六十三）年、吉沢は在職のままで病死、実験音声学研究室にはその後益子幸江（フランス語学科、昭和五十四年卒）が後任として着任、八九年に竹林が停年退職した後の一般音声学の講座は中川裕（ロシア語学科、昭和五十九年卒）が引き継ぎ、現在に至っている。また、八八年には竹林の教え子である斎藤弘子（昭和五十七年卒）が英米語学科に着任、それまで竹林が受け持っていた英米語学科生必修の音声学の授業を引き継いだ。

以上、外語における音声学という観点から見てきたが、このほかにも外語で教育を受けて他大学で音声学の研究・教育に携わっている者も数多い。赤松力（昭和三十一年卒）は、英国リーズ大学で音声学を講じて活躍している。

4　英語辞書編集

明治期

英和辞典の原点は、実質的には、一八六二（文久二）年に出版された堀達之助編『英和対訳袖珍辞書』（洋書調所）とされる（竹林滋「英和辞典」、竹林滋・千野栄一・東信行編『世界の辞書』研究社、一九九二年、五〇五ページ）。

本学の大学案内によれば、この辞書を発刊した洋書調所から開成所、開成学校を経て、東京外国語学校が一八七三（明治六）年に、いったんは開校された。当時、洋学摂取のためには英和対訳辞書のようなものは、絶対に必要であったが、それが本学の遠い前身の洋書調所で作られたということは、本学は、いわば生まれる前から、時代の要請であった西洋文明を取り入れようとする運動の一翼を担っていたのである。そしてそのことが、その後の外語を中心とする辞書作りの大きな発展、さらには諸外国との関係の発展のきっかけの一つとなったと言っても過言ではない。外語関係者で、辞書編集者としてもっとも早く名前が登場するのは、神田乃武ではないかと思われる。神田は一九〇九（明治四十二）年に『英和双解熟語大辞典』（有朋堂）を南日恒太郎と共著で出版し、続いて、一一年に『模範英和辞典』（三省堂）、一九二二（大正十一）年に『袖珍コンサイス英和辞典』（三省堂）を、いずれも金沢久と共著で出版した（月刊『言語』第一三巻、第一号、一九八四年、二〇三ページ）。しかし、『英語学人名辞典』（佐々木達・木原研三編、研究社、一九九五年）は、「神田は辞書にも編者としてしばしば名をつらねているが、彼が実際に関与したかは疑わしい」と述べ（一七〇ページ）、また、早川勇は、『英和双解熟語大辞典』について、「勝俣銓吉郎が実質上の著者」としている（『初期英和辞典の編纂法』中部日本教育文化会、一九九七年、一九七ページ）。さらに、神田は『和英袖珍新字彙』（三省堂）をイーストレーキ（F. Warrington Eastlake）と共著で出版したが、その初版は一八九一年に出た（早川勇『日本英語辞書年表』岡崎学園国際短期大学人間環境研究所、一九九八年、三九ページ）。

次に早い時期に、辞書編集者として名をつらねているのは、片山寛（明治三十三年卒）と上條辰蔵（同三十四年卒）である。片山と上條は一九〇六（明治三十九）年、『英語難句難語辞典』（参文舎、文海堂、積文社）を松浦与三松と共編で出版した（早川・前掲『編纂法』、一九五ページ）。さらに、同年以来、本学の外国人教師であったメドレーは一九一四（大正三）年、『袖珍和英辞典』（有朋堂）を入江祝衛と共編で出版した（吉沢典男「袖珍辞典」、月刊

『言語』第一四巻、第四号、一九八五年、一五九ページ)。

岩崎民平・佐々木達・小川芳男—第一世代の辞書編集者

本学の関係者が英語の辞書編集・執筆に、本格的にかかわるようになる最大の契機は、岩崎民平（大正二年卒）が『新英和大辞典』（研究社）の編集に参画し、しかも、この辞書をほぼ現行のような完成された形にするのに重要な役割を果たしたことであった。岩崎は、岡倉由三郎の依頼により『新英和大辞典』（一九二七年）改訂の編集主任になり、一九三六（昭和十一）年に第二版が刊行されたあとも、引き続き、この辞書の共同主幹として第三版、第四版の編集に尽力、内容の向上に多大の貢献をした。次に、岩崎は四一年に『簡約英和辞典』（研究社）を編者として刊行し、辞書作成の権威者としての地位を確立した。この辞書には、教え子の上本佐一（大正十五年卒）、沢崎九二三（昭和二年卒）が執筆者として協力した。この辞書はその後、大幅な改訂・増補が行われ、五六（昭和三十一）年に『新簡約英和辞典』として出版された。岩崎は四七年に『ポケット英和辞典』（研究社）を、さらに六六年には小稲義男（昭和二年卒）との共編による『研究社新英和中辞典』を刊行した。後者はいわゆる学習英和辞書のブームをもたらした。岩崎がこれらの辞書の編集に活躍するにつれて彼に直接教えを受けた外語出身者が、だんだんと岩崎の辞書の執筆・編集に参画するようになってきた。『研究社新英和大辞典』第三版（一九五三年）では、荒巻鉄雄（大正十二年卒）、小稲義男、守屋獅郎（ともに昭和二年卒）、沢崎九二三、岩田一男（ともに同七年卒）、山川喜久男（同十五年卒）、半田一郎（同二十年卒）が岩崎のもとで執筆作業に加わり、第四版（一九六〇年）では上記に加えて、上本佐一、山下雅巳（ともに同十七年卒）、水庭進（同十九年卒）、竹林滋（同二十三年卒）が執筆者として参画した。

岩崎に続いて、英米科と辞書編集とのかかわりを深めたのは佐々木達である。佐々木は外語における英語学を学問

として確立させたと言えるが、佐々木は、そしておそらく岩崎も、英語学の講義の中で辞書編集に言及することはほとんどなかった。前掲『英語学人名辞典』は、「佐々木と辞書編集との関係は、戦後三省堂から『コンサイス英和辞典』の全面的改訂を依頼されてからである。宮田幸一、羽柴正市、木原研三の協力で始めたこの仕事は難航を極め、協力者も大幅に増員して昭和二十六年に完成した。多くの協力者による『グローバル英和辞典』（昭［和］五八年）にも佐々木の寄与が大きい」と述べている（四〇五ページ）。『新コンサイス英和辞典』の第二版は一九八五（昭和六〇）年に出版され、佐々木の教え子である山岸和夫、宮川幸久（ともに昭和三十四年卒）などが執筆協力した。佐々木が初めて手がけた画期的な学習辞書『グローバル英和辞典』（三省堂、一九八三年）には、教え子・卒業生としては芦川長三郎（昭和二十二年卒）、山岸和夫、宮川幸久、宮井捷二（同三十六年卒）、津谷武徳（同三十九年卒）、佐藤尚孝（同四十五年卒）が編集・執筆に加わった。佐々木の辞書作りに協力した教え子としては、ほかに、渡辺勝馬（昭和三十三年卒）、渡邊末耶子（同三十四年卒）がある。

岩崎の教え子であった小川芳男（昭和六年卒）は英語教育の専門家として、数多くの辞書にかかわった。たとえば、一九七五（昭和五十）年に小川が監修した『英和中辞典』（旺文社）が出版された。小川の辞書編集に協力した多くの卒業生の中には、桃沢力（昭和十六年卒）、稲見芳勝（同二十二年卒）、齋藤次郎（フランス語、同二十六年卒）、堀内克明（同三十一年卒）、柏原信幸（同四十年卒）等がいる。

岩崎、佐々木、小川とだいたい同じ時期に外語の教授であった人の中で、辞書編集にかかわったのは、乾亮一と梶木隆一である。乾は岩崎の辞書編集の重要な協力者であり、梶木は『小学館ランダムハウス英和大辞典』（一九七三年）の編集委員会の委員として、この辞書の企画に大きく貢献した。編集委員としては、ほかに、小栗敬三（昭和二年卒）、小西友七（同十六年卒）、堀内克明の名前がみられる。なお、この小学館の大型辞書の第二版は一九九三年に

刊行され、その編集主幹陣に小西、堀内が参画し、執筆・校閲者には松村好浩（昭和三十一年卒）、渡邊末耶子、山岸和夫、山中桂一（同三十八年卒）、馬場彰（同四十三年卒）など一〇名近くの卒業生の名がみられる。

第二世代の辞書編集者

同窓会の百年史の「辞書編纂・辞書学と外語」を担当している中尾啓介（昭和三十年卒）は「辞書編纂の面で外語関係者が岩崎、佐々木、小川を軸に活躍した時期を第一世代とすれば、第二世代はその多くが第一世代、岩崎、佐々木、小川の直接の教え子である。あるいは第一世代と第二世代の差は、岩崎民平を共通の土台としたうえで、佐々木達の前と後との世代と言える」と述べている。

第一世代の三人の教授の教え子、つまり第二世代が四つぐらいのグループを形成して、それぞれの出版社から英和辞書、和英辞書などを出版するという形で外語の辞書編集活動は連綿と続いていくことになる。もちろん、このグループ分けの輪郭はそれほど明確ではなく、グループ間の人的交流も見られる。

第二世代の最大のグループは岩崎民平の学問・辞書編集についての考え方を受け継ぐ、岩崎研究会のメンバーを中核とするグループである。一九八〇（昭和五十五）年、このグループが中心となり『新英和大辞典』第五版（研究社）が出版された。この日本を代表する大型辞書には、編集主幹の小稲義男をはじめとして、編集者に山川喜久男、小西友七、竹林滋、編集協力者としては小川繁司（昭和三十年卒）、東信行（同三十三年卒）、渡邊末耶子、その他、執筆者として十数名の卒業生が参加した。

現在、岩崎研究会の会長、副会長である竹林滋、小島義郎（昭和二十三年卒）が中心となったグループが、七、八年間の苦労の末、一九七二（昭和四十七）年本格的な学習英和辞書『研究社ユニオン英和辞典』の発刊に漕ぎ着けた。

現在、この辞書は、編者に東信行を加え『ライトハウス英和辞典』第三版（研究社、一九九六年）、『カレッジライトハウス英和辞典』（研究社、一九九五年）として学習英和辞書界のリーダー的存在となっている。また、岩崎の辞書作りのしめくくりとでも言うべき『新英和中辞典』第六版は一九九四年に出版されたが、編者として竹林滋のほかに小川繁司が加わり、渡邊末耶子、諏訪部仁（昭和三十七年卒）、市川康男（大学院、同四十七年修了）など十数名の外語出身者が執筆に協力した。岩崎の流れを汲むほかの主な辞書としては、一九八四年刊行の『リーダーズ英和辞典』（研究社）がある。この辞書は、松田徳一郎（昭和三十二年卒）が中心となり、横山一郎（同三十年卒）、東信行が編集に、高橋作太郎（同四十年卒）が編集協力に参画し、執筆者には木村建夫（同四十年卒）、岡村祐輔（大学院、同四十六年修了）ほかの卒業生が加わった。同じく松田徳一郎の監修による百科事典的な補遺として、『リーダーズ・プラス』が一九九四年に出版され、高橋（作）、木村、馬場が編集陣に加わった。

第二世代のもう一つのグループは佐々木達の流れを汲むグループで、佐々木の東大での教え子木原研三、外語での教え子芦川長三郎等が中心となっていくつかの英和辞書の編集が続けられて来ている。たとえば、一九九四年刊行の『新グローバル英和辞典』（三省堂）、一九九六年刊行の『ニューセンチュリー英和辞典』（三省堂）である。また、このグループによるものではないが、同じく三省堂より一九九七年に刊行された、若林俊輔（昭和三十年卒）編『ヴィスタ英和辞典』は、発音表記で、原音に近い「カナ発音」と従来の発音記号を併用するなどの特色でユニークな学習英和辞書として注目されていることも付け加えねばならない。

特記すべきもう一つのグループは小西友七を中心とし、小西の教え子などで形成される、関西のいくつかの大学を本拠とするグループである。小西はすでに触れた辞書の編集に加えて、『ジーニアス英和辞典』改訂版（大修館書店、一九九六年）に代表されるジーニアス・シリーズの編集主幹、『ニューセンチュリー和英辞典』（三省堂、一九九一

年）の編集主幹、『プログレッシブ英和中辞典』（小学館、一九八〇年）などの共編者として超人的とも言える活躍をしている。また、小西は『ラーナーズ プログレッシブ英和辞典』（小学館、一九九二年）を堀内克明らとの共編で出版した。堀内克明も、英和・和英辞典、英語情報辞典、俗語辞典、イディオム辞典などを編集し精力的な活躍をしている。

これまでに和英辞典についても触れたが、従来の和英辞典は一九七四（昭和四十九）年に刊行された、山田和男（昭和二年卒）ほかが監修し、筧太郎（大正十五年卒）が編集協力した『新和英大辞典』（研究社）やその前身の大型の和英辞典に代表された。すなわち、学習者用のユーザーフレンドリーな和英辞書は存在しなかった。ところが、学習者用英和辞書の出現とともに、当然のことながら、学習者用和英辞書への需要は高まって来た。前述の同窓会の百年史で中尾啓介は次のように述べている。

和英の制作は達意の英文の書き手の名人芸として敬し遠ざけられてきた。『新クラウン和英辞典』（三省堂、一九六一）の編者山田和男、『新コンサイス和英辞典』（三省堂、一九七五）の編集協力者伊藤富士麿（昭和二十二年卒）などはこのタイプを代表する。これに対して、小島義郎は日英語対照論、意味論、語用論などに基礎をおいた画期的な発表用和英辞書『ライトハウス和英辞典』（研究社）を一九八四年、世に出した。この和英辞典の出現は社会一般の従来の和英辞書の認識を覆えし、和英辞書についての新たな需要を掘り起こすことに成功し、和英辞書制作・出版は、この辞書を機にそれ以降の流れを一変した。これはその後の『カレッジライトハウス和英辞典』（一九九五）とあわせて一〇名を超える同窓生がその執筆・編集にあたっている。なお、山田の『新クラウン和英辞典』は猪狩博（同二十二年卒）、竹前文夫（同三十五年卒）によって改訂されている。

なお、『カレッジライトハウス和英辞典』の編者は小島義郎、竹林滋、中尾啓介で、編集・執筆には小川繁司、宗

宮喜代子（昭和四十五年卒）、朝尾幸次郎（同四十六年卒）、増田秀夫（大学院、同五十年修了）等が協力した。

特殊辞典

英和・和英辞書以外にも、外語関係者による辞書編集は多くみられるが、数があまりにも多いのでとても列挙できない。ここで、手元にあるものをいつくか挙げてみる。たとえば、東信行・諏訪部仁訳編『研究社－ロングマン　イディオム英和辞典』（一九八九年）ならびに『研究社－ロングマン　句動詞英和辞典』（一九九四年）は単なる訳書ではなく、「日本語版では原著の特性を充実させるとともに、日本人使用者に役立つ情報を新たに盛ることにした」（日本語版まえがき）辞書である。この辞書には多くの卒業生が協力した。『ＢＢＩ英和連語活用辞典』（丸善、一九九三年）には、馬場彰、小倉敏博（昭和四十八年卒）が訳編者として名をつらねている。さらに、『岩波新英和辞典』（一九八七年）では東信行、諏訪部仁、馬場彰が編集に、その他数名の卒業生が執筆に、協力した。なお、それぞれの専門分野からの辞書編集への貢献もさまざまみられるが、ここですべてに触れる余裕はない。たとえば、語源関係では秦宏一（昭和三十九年卒）、木村建夫、山本文明（同四十五年卒）、音声学関係では竹林滋、渡邊末耶子、清水あつ子（昭和四十五年卒）、斎藤弘子（同五十七年卒）等がいろいろな辞書の編集に協力している。

一九三四（昭和九）年から四一年まで本学の外国人教師であったアルバート・シドニー・ホーンビー（Albert Sidney Hornby）は、やはり本学の外国人講師であったハロルド・E・パーマー（Harold E. Palmer）発案の動詞型を整理発展させ、世界で初めての外国人学習者用の英英辞典 *An Idiomatic and Syntactic English Dictionary*（開拓社）を他の二人の著者と共編で、一九四二年に刊行した。この辞書はその後、何回も改訂・改名され、一九九五年に刊行された *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English* 第五版（Oxford University Press）に引

き継がれている。なお、パーマーは一九二九（昭和四）年発刊の竹原常太編『スタンダード英和辞典』（大修館）に発音担当として名をつらねている（早川・前掲『年表』、七一ページ）。

辞書学の興隆

ところで、辞書編集は既に第三・第四世代に重心が移りつつあって、一部は岩崎研究会の若手の会員がその役割を担っているのが現状である。ここ数年の間に、辞書学は、国内的にも国際的にも、非常に盛んになり、主として英語関係の辞書編集にかかわっている人が辞書学の分野で論文を発表したり、学会や研究会で研究発表をすることが多くなった。そのような学問的な動向を反映したような形で、一九九五（平成七）年度から本学で「辞書学」という授業題目の講義が宮井捷二によって始められた。この講義は旧カリキュラムでは、英米科以外の学生も受講できる英語学特殊研究科目として、新カリキュラムでは、言語・情報コースの専修専門科目・欧米第一課程（英語・ドイツ語専攻）地域専門科目として開設されている。

この辞書学の入門的な講義は、lexical semanticsの理論などを応用して、語義論、辞書の歴史・種類・構成、二言語辞書、学習辞書などについて、辞書編集の具体例にも触れながら、論じられている。なお、この講義のことは北米辞書学会の機関誌*Dictionaries*（一九九七年、七九ページ）で詳しく紹介された。このようにして、「辞書学」は今や、本学の研究・教育体制の中で定着したと言える。

付表　英語関係者が編集などに関与した主な英和・和英辞典の一覧

この一覧表には原則として初版のみを載せた。ただし、編集者、執筆者、その他に変更があった場合は第二版以降

も含めたが、数が多いこともあって、正確でない部分があるかもしれない。なお、ホーンビーほか編の英英辞典もこの表に載せた。

一八九一年　『和英袖珍新字彙』（三省堂）（イーストレーキ、神田乃武共著）
一九〇二年　『新訳英和辞典』（三省堂）（神田乃武ほか編）
一九〇六年　『英語難句難語辞典』（参文舎、文海堂、積文社）（片山寛、上條辰蔵ほか編）
一九〇九年　『英和双解熟語大辞典』（有朋堂）（神田乃武、南日恒太郎共編）
一九一一年　『模範英和辞典』（三省堂）（神田乃武ほか編）
一九一四年　『袖珍和英辞典』（有朋堂）（A・W・メドレー、入江祝衛共編）
一九一六年　大増補『模範英和辞典』（三省堂）（神田乃武ほか編）
一九一七年　『袖珍英和辞典』（三省堂）（神田乃武、金沢久共編）
一九一九年　『袖珍和英辞典』（三省堂）（神田乃武、石川林四郎共編）
一九二二年　『袖珍コンサイス英和辞典』（三省堂）（神田乃武、金沢久共編）
一九二五年　『例解　中学英和新辞典』（三省堂）（吉岡源一郎編）
一九三六年　『研究社新英和大辞典』第二版（研究社）（編集主任　岩崎民平）
一九四一年　『簡約英和辞典』（研究社）（編集主任　岩崎民平）
一九四二年　*An Idiomatic and Syntactic English Dictionary*（開拓社）（A・S・ホーンビーほか編）
一九四七年　『ポケット英和辞典』（研究社）（編集主任　岩崎民平）

一九五三年　『研究社新英和大辞典』第三版（研究社）（岩崎民平ほか編集）
一九五六年　『新簡約英和辞典』（研究社）（編集主任　岩崎民平）
一九六〇年　『研究社新英和大辞典』第四版（研究社）（岩崎民平ほか編集）
一九六一年　『新クラウン和英辞典』（三省堂）（山田和男編集）
一九六七年　『研究社新英和中辞典』（研究社）（岩崎民平、小稲義男共編）
一九七二年　『研究社ユニオン英和辞典』（研究社）（竹林滋、小島義郎共編）
『アンカー英和辞典』（学習研究社）（小西友七ほか編集）
一九七三年　『現代英和辞典』（研究社）（岩崎民平監修）
一九七四年　『新和英大辞典』第四版（研究社）（山田和男ほか監修）
一九七五年　『新コンサイス英和辞典』（三省堂）（編集　佐々木達）
『英和中辞典』（旺文社）（小川芳男監修）
『アメリカ俗語辞典』（研究社出版）（堀内克明訳編）
一九八〇年　『新英和大辞典』第五版（研究社）（小稲義男ほか編集）
『プログレッシブ英和中辞典』（小学館）（編集主幹　小西友七ほか）
一九八三年　『グローバル英和辞典』（三省堂）（佐々木達ほか編集）
一九八四年　『リーダーズ英和辞典』（研究社）（松田徳一郎監修）
『ライトハウス英和辞典』（研究社）（竹林滋、小島義郎共編）
『ライトハウス和英辞典』（研究社）（小島義郎、竹林滋共編）

一九八五年　『新コンサイス英和辞典』第二版（三省堂）（佐々木達ほか編集）
一九八七年　『ニューセンチュリー英和辞典』（三省堂）（佐々木達ほか編集）
一九八八年　『ジーニアス英和辞典』（大修館）（編集主幹　小西友七）
『ニュー・アンカー英和辞典』（学習研究社）（小西友七ほか編集）
一九九〇年　『ライトハウス英和辞典』第二版（研究社）（竹林滋、小島義郎共編）
『ライトハウス和英辞典』第二版（研究社）（小島義郎、竹林滋共編）
一九九一年　『ニューセンチュリー英和辞典』第二版（三省堂）（芦川長三郎ほか編集）
『ニューセンチュリー和英辞典』（三省堂）（編集主幹　小西友七）
『ニューサンライズ英和辞典』（旺文社）（小川芳男監修）
一九九二年　『ハイトップ英和辞典』（旺文社）（小川芳男監修）
『ハイトップ和英辞典』（旺文社）（小川芳男監修）
『ラーナーズ　プログレッシブ英和辞典』（小学館）（小西友七ほか編集）
一九九四年　『新グローバル英和辞典』（三省堂）（芦川長三郎ほか編集）
『リーダーズ・プラス』（研究社）（松田徳一郎監修）
『小学館ランダムハウス英和大辞典』第二版（小学館）（編集主幹小西友七、堀内克明ほか）
『グリーンライトハウス英和辞典』（研究社）（竹林滋、小島義郎共編）
一九九五年　『カレッジ・ライトハウス英和辞典』（研究社）（竹林滋、小島義郎、東信行共編）
『カレッジ・ライトハウス和英辞典』（研究社）（小島義郎、竹林滋、中尾啓介共編）

『新クラウン和英辞典』第六版（三省堂）（山田和男ほか編集）
一九九六年　『ニューセンチュリー英和辞典』第三版（三省堂）（芦川長三郎ほか編集）
『ニューセンチュリー和英辞典』第二版（三省堂）（編集主幹　小西友七）
『ライトハウス英和辞典』第三版（研究社）（竹林滋、小島義郎、東信行共編）
『ライトハウス和英辞典』第三版（研究社）（小島義郎、竹林滋、中尾啓介共編）
一九九七年　『ヴィスタ英和辞典』（三省堂）（若林俊輔編）

5　英米文学

(1)　戦　前

戦前の外語は、学術研究を旨とする大学ではなく、一九二七（昭和二）年に四年制への「昇格」を遂げはしたものの、一貫して語学の専門学校であったため、英米文学の研究とは縁が薄かった。この点については、龍口直太郎（大正十四年卒）や安藤一郎（昭和三年卒）の言を引いてすでに述べたところである（「4　東京外国語学校　(5)　英語科・英語部の性格」参照）。また、草創期の教授陣のなかに、文学研究を専門とするものはいない（マッケローは、のちの経歴からすると、あるいは文学の専門家であったかもしれないが、彼が外国語学校在任中に、音声学のほか文学作品を教えたかどうかはわからない。いずれにしてもマッケローは、わずか三年でイギリスに帰国してしまった）。英文科出身の専任教官は、一九一七（大正六）年の井手義行（教授）の着任まで待たなければならなかったが、英語好きが集まっている英語科とあれば、生徒のなかから英文学に目覚め、その道に進もうと考えるものが出てくるのは

自然の成り行きであろう。第三回生（明治三十五年卒）の大橋栄三（一八七九－一九六六）はその一人であった。

大橋は、京都一中教諭、明治専門学校教授を経て、一九二一（大正十）年、母校に教授として迎えられた。大橋の業績のなかでもっとも有名で、今日もなお英文学徒を裨益し続けているのは、マーク・トウェインの傑作 *The Adventures of Huckleberry Finn* に付された解説と注釈であろう。これは「研究社英文学叢書」の一冊として一九二三年に出版された。この叢書は、市河三喜と岡倉由三郎監修のもと、当代の英文学者を総動員して、英米文学の代表的作品の注解つきテキストを提供しようと試みたもので、二一年に第一巻を刊行し、一九三二（昭和七）年に全百巻をもってひとまず完了した。一出版社の企画ではあるが、日本の英文学研究の歴史において画期的な出来事であった。大橋の『ハック・フィン』の注釈についていえば、英米に注釈付きのテキストはおろか、トウェインの専門辞典もまったくなかった時代に、よくこれだけ正確で詳細な注をつけえたものと感心しないわけにいかない。彼はのちに評伝 *Mark Twain*（和文）（研究社、一九三六年）も書いた。注釈の仕事としては、英文学叢書の続編に収められた、*Two or Three Graces* (Aldous Huxley), *Jude the Obscure* (Thomas Hardy) のほか、多数が知られている。

注釈といえば、岩崎民平の名を落とすわけにはいかない。岩崎が注釈の仕事を始めた契機についてはすでに述べたので繰り返さないが（「4　東京外国語学校、（4）昭和期の制度」参照）、彼は上記英文学叢書のうち三巻を手がけている。すなわち、*Kim* (Kipling)（一九二四年）、*English Short Stories*（一九二五年）、*Plain Tales from the Hills* (Kipling)、（一九三〇年）である。正確で勘所を押さえた注は、岩崎の名を広く世に知らしめるところとなった。しかし、すぐれていたのは注釈ばかりではない。これらの本の巻頭に付された解説のなかで、岩崎は数十ページにわたる作家論・作品論を展開し、英文学者としての才能も発揮したのだった。注釈の仕事は、一九六二（昭和三十七）年の *How to Scrape Skies* (Mikes) まで、その後も断続的に続けている。岩崎には注釈とともに、翻訳も何点

かある。もっとも有名なものは、おそらく、角川文庫に収められて多くの読者を獲得したルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』（一九五二年）であろう。これはもともと、『不思議国のアリス』（一九二九年）として、研究社の「英文訳註叢書」に収められていたものである。

話が前後するが、明治期の外国語学校は、一人の傑出した英文学者を生みだしている。石田憲次（明治四十四年卒）である。石田（一八九〇―一九七九）は、岩崎が外語受験のため上京したとき、同郷（浅田栄次の故郷でもある山口県徳山）のよしみで世話をして以来、岩崎と終生変わらぬ親交を結んだ。外語を出ると、京都帝国大学文科大学に進み、一九一六（大正五）年に卒業。同志社の教授を経て、一九二四（大正十三）年に京都大学に迎えられ、上田敏、厨川白村のあとを受け継いで、同大学英文科の発展に多大の貢献をした。

本節の冒頭に述べたとおり、英語科に英文科出身の教授が着任したのは、一九一七（大正六）年の井手義行（教授）をもって最初とする。続いて、翌々年に千葉勉が教授陣に加わっている。ともに東大英文科の出身で、千葉のほうが井手の六年先輩に当たる。千葉と同じ年に校長に就任した長屋順耳、および一九三二（昭和七）年に長屋の跡を継いだ戸澤正保校長もまた、東大英文科を卒業している（長屋、戸澤、千葉、井手はそれぞれ、明治三十年、同三十二年、同四十年、大正二年卒）。学科の運営に大きな力を振るい、中学校の英語教師養成に関心を寄せていた浅田の没後に、帝大出身の文学の専門家が立て続けに採用されたことは、外語の英語科の性格を変えずにおかなかったと思われる。公式の記録がみつからないので憶測でしかないが、チョーサーやミルトンの講読、英文学史の講義などは彼らの着任がもたらしたものではなかろうか。龍口直太郎（大正十四年卒）は、千葉を追悼するエッセイに「外語に文学の窓を開いた人」というタイトルを付けている（千葉亨・堀憲義編『千葉勉の仕事と思い出』（私家版、一九六四年、八九ページ）。龍口は戦後長らく早稲田の教授を務め、アメリカ文学を精力的に紹介した。外語にも非常勤講師

として出講している。また、千葉がとりわけ目をかけた生徒の一人といわれる島田謹二（大正十一年卒）の語る師の思い出には、鋭く、かつ示唆に富む指摘が含まれているので、多少長いが原文を引用しておこう。

何となくのどかな大きな感じのする授業であった。……旧制高等学校などの文科系統の教室がもつある伝統を、先生は伝えていたのだろう。……外国語学校というところは、外国語の専門教育をめざすのだから、発音や文法に重きをおくのは当然である。ただそれが、あまりテクニカルになりすぎると、時々こっけいな方向に傾きすぎ、一種の「英語技手」の育成に終始してしまう弊も生まれないわけではない。……そうした方向にだけ指導される生徒たちは、うっかりすると、いかにも人間の小さい、みじめな存在になることだってないとはいえない。……千葉先生の存在は、そういう意味で、外国語学校英語科の大勢の antidote だったといえよう。

（前掲書、七七ページ）

島田は、周知のとおり、日本に比較文学・比較文化研究を確立した大功労者である。外語卒業後東北大学英文科に進み、台北大学講師を経て、一九四九年から六一年まで東大教授を務めた。Antidote 千葉の言葉としては、「善良な中学教師をつくることだけが、外語の特色ではない」や、「注釈もいい、しかし注釈ばかりしたってだめだ」も伝えられている（前掲書、九二―九三ページ、一一四ページ）。

龍口、島田のほか、堀大司（大正十三年卒、一九〇三―六八）と安藤一郎（昭和三年卒、一九〇七―七二）も千葉の薫陶を受けて文学を志している。堀は、島田同様東大に進学、戦後東大教授となった。堀の業績は、量において島田に譲るものの、いずれもユニークである。安藤については、このあと「戦後」の節で紹介することにして、ここでは、龍口が安藤らと語らい、東大出身の西川正身らも引き入れて昭和初年に起こしたＭＥＬと称するグループの運動のことを記しておく。ＭＥＬとは、Modern English Literature の略で、グループは、安藤にいわせると、「現代英文学研究の旗印を掲げ、パンフレットや訳註叢書を出しはじめた。ジョイス、ロレンス、ウルフ等を全面的に取り上

げたので、当時（昭和四年）としては、かなりショッキングで、ある『物議』をかもしたのであった」（前掲書、九二ページ）。若き日の安藤（当時二十二、三歳）の威勢のいいタンカを聞く思いがするが、西川は、これがアカデミズムに対する反逆精神から出ていて、運動として一定の成果を上げたことを認めながら、六冊出た訳註叢書の半分までが「アンブローズ・ビアス、ジョン・ゴールズワージー、ヒュー・ウォルポールというのですから、ＭＥＬグループの仕事としては看板に偽りありといわれても仕方がなく……」と、もう少し覚めた見方をしている（西川正身『アメリカ文学覚え書（増補版）』研究社出版、一九七七年、三九一ページ）。

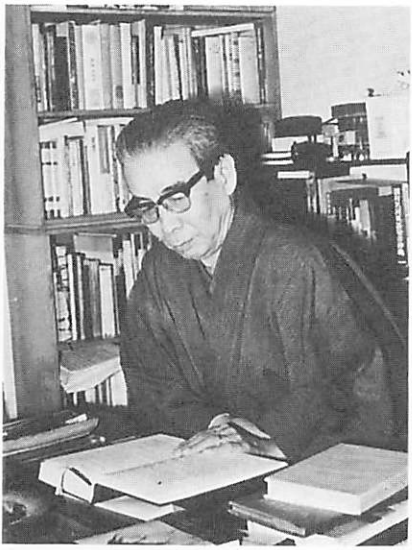
（2）戦　後

一九四四（昭和十九）年に千葉が退職し、井手も四五年には外事専門学校の校長事務取扱を経て、校長に就任したので、戦後における英文学の研究と教育は、四一年、四二年に相次いで着任していた、安藤一郎、梶木隆一の二人に任されることになった。新制の東京外国語大学が設立されて二年後、一九五一（昭和二六）年に、小野協一（八四年まで在職）を迎えて、文学の専門家がふたたび三名となっている。小野もまた、東大英文の出身（昭和二十一年大学院修了）である。

安藤（七〇年まで在職）は、すでにＭＥＬ運動に関連してふれる機会があったが、いわゆる文学青年で、在学中に同人誌を発刊し、外語卒業（昭和三年）の二年後、二十三歳の年に、詩集『思想以前』を自費出版して詩壇にデビューしている。生涯詩作を続け、最後の詩集『夢のあいだ』（思潮社、一九六七年）まで、合計八冊の詩集を刊行した。詩の翻訳も多数手がけている。もっとも広く知られているのは、カール・サンドバーグの『シカゴ詩集』（岩波文庫版、一九五七年）であろうが、戦後文芸出版社が競って企画した世界文学全集や詩人全集にも安藤の訳詩を数多く見

出すことができる。また、かねてからジェイムズ・ジョイスに注目して、その諸作品を読んでおり、上述ＭＥＬ運動の一環として、〝The Dead〟の訳註（『死せる人々』開拓社、一九三〇年）を出し、一九三二（昭和七）年には岩波文庫版『ユリシーズ』に六名の共訳者の一人として名を連ねたほか、単独で *Dubliners* を全編翻訳している（『ダブリン市井事』弘文堂、一九四〇－四一年。河出書房版をへて、最後は新潮文庫版『ダブリン市民』一九五三年）。戦後は一挙に英語の時代が到来し、安藤のもとには『英語青年』のような専門誌のみならず、一般雑誌や新聞、はては放送局からも、原稿執筆・出演の依頼が舞い込んだのであろう。想像を越える量の仕事をこなしている。

「V. Sackville-West と英国の伝統」（『英文学研究』第一六巻、一九三六年）で研究生活を開始した梶木は、二十世紀のイギリス小説を専門とし、外語では（七三年まで在職）この領域を中心に講義・講読を行っているが、後年にはメルヴィルを読んだり、米文学概論を講じたこともあった。対外的な活動範囲は、同僚だった小川芳男に劣らず広く、戦後すぐ手がけた児童文学の翻訳、梶木の名をとくに世に広めた高校生向けの英語参考書、検定教科書、辞典類の執筆から、ＮＨＫラジオ・テレビの英語講座の担当にまで及んでいる。梶木に対して、小野（在職一九五一－八四年）は同じイギリス文学でも、演劇、とりわけ十七世紀初頭から半ばにかけて活躍した、ベン・ジョンソン、ジョン・ウェブスター、ジョン・フォードらの作品を好んで授業で取り上げるとともに、それらに関する研究論文を発表してきた。シェイクスピア作品では『から騒ぎ』を邦訳している（筑摩書房、一



安藤一郎

九六七年）。同時に、二十世紀の文学者オーウェル、コンラッド、ジョイスらにも関心を寄せ、前二者については研究書と翻訳を著している。スペインの内戦にかかわった詩人たちを論じた『スペインの内戦をめぐって』（研究社出版、一九八〇年）が、外語在職中の最後の著書である。

戦後はアメリカ文学が読書界で大流行するとともに、多くの大学で盛んに研究・教授されるようになった。一九五一年から五四年にかけて龍口直太郎に非常勤講師として出講してもらってこの新しい動きに対処していた外語で、アメリカ文学の研究が活性化・本格化したのは、一九五五（昭和三十）年にいたって、大橋健三郎（昭和十六年卒、その後、昭和十八年東北帝国大学法文学部文学科卒）が専任教官（助教授）として着任し、フォークナーを取り上げて「アメリカ文学講読」の店開きをして以来のことである。しかし、大橋は六二年には東大文学部へ転出してしまうので、外語に在職した期間はわずか七年であった。この間に執筆した著書は『危機の文学――アメリカ三十年代の小説』（南雲堂、一九五七年）一点のみであるが、その後、独創性に富む研究書を矢継早に著すとともに、日本アメリカ文学会の創設に力を尽くし、その会長を二期務めた。

大橋が転出した一九六二年に、外語は二人の文学者を迎え入れている。西田實（七九年まで在職）と河野一郎（九一年まで在職）である。西田は、戦前に東京高師を出たあと、いったん教職に就き、戦後東大大学院を卒業した。外語では、大橋のあとを継いで米文学講読と米文学史を担当した。小説のみならず、演劇もしばしば取り上げている。一方河野（昭和二十六年、二十九年卒）は、英米文学講読を担当するかたわら、「翻訳演習」を開設して、英米語学科の授業に新風を吹き込んだ。この演習では、英文の和訳だけでなく、年度によって英文エッセイや和文英訳を課題として与え、河野ならではのユニークな訓練を行っている。西田と河野はともに数多くの名訳を世に送って、翻訳の名手の名をほしいままにした。西田が訳したのが、ほとんど二十世紀のアメリカ小説であるのに対して、河野には、

（イギリスに傾いてはいるが）英米双方の小説に加えて、数は少ないものの詩の翻訳（日本語の詩の英訳も含む）もあり、また数冊の翻訳指南書もある。西田が注釈書も手がけたのに対して、河野は翻訳に徹した。西田の翻訳でもっともよく知られ名訳の誉れ高いのは、岩波文庫に収められたマーク・トウェインの『ハックリベリー・フィンの冒険（上・下）』（一九七七年）であろう。一方河野は、筆者への私信の中でこれまでの仕事でいちばん好きな作品として、カポーティの『遠い聲　遠い部屋』（新潮社、一九五五年）を挙げている。

安藤が退職した翌年の一九七一（昭和四十六）年、志村正雄（助教授）がアメリカ文学の担当者として着任した（九二年まで在職）。日本の読書界では志村は、アメリカ文学の最先端を行くジョン・バース、トマス・ピンチョン、ドナルド・バーセルミらの作品やゴシック小説の精力的な翻訳者・紹介者として知られている。しかし、同時にアメリカ文学研究者として、過去三〇年間にわたり数多くの批評・論文を（ある時は英文で海外に向けて）発表してきた。それらは、新しい文学に限らず、ホーソン、メルヴィル、クレメンス（マーク・トウェイン）、クーパー、ヘンリー・ジェイムズから、フォークナー、ヘミングウェイ、ガートルード・スタインなどにまで及び、個々のテーマは、しばしば時と場所を越えた文学や文化理論との対比のなかで論じられて、ありきたりなことは言うまいとする筆者の信念に貫かれている。外語在職中の志村のもっとも重要な業績は、『英語青年』誌上に八八年から九〇年まで二二回にわたって連載された「アメリカ文学と神秘主義」であろう。これは加筆・修正され、九八年にいたって『神秘主義とアメリカ文学――自然・虚心・共感』のタイトルのもとに単行本化された（研究社出版、一九九八年）。志村の仕事の紹介の最後に、「日本における文学研究の伝統的正道は注釈にあると考えるので、私は注釈の仕事を重んじ、主として大学生を視野に置いた注釈本を十冊ほど出している」との志村自身の言葉を引用しておく（志村正雄「教育研究業績書」未公刊、一九九五年、二七－二八ページ）。

志村以後に着任した英米文学の教官については、「一　組織と制度の変遷」を参照されたい。本稿「英米文学」は、執筆者をえられず、やむをえず全体の責任者の高橋が締め切り間際になってまとめたため、全体としてきわめて不十分なものとなった。とりわけ、戦後外語を卒業し他大学で活躍している英米文学の専門家には、いっさいふれることができなかった。関係者の寛恕を乞う次第である。